

主な意見等の整理（第2回）

（幼児教育と小学校教育の円滑な接続）

- 小学校以降の各教科等の3つの資質・能力と幼児教育との緩やかなつながりを含め、相互理解を図ることが重要。
- 幼保小が協働に向かっていくためには、園のより積極的なアプローチが出てくるとよい。小学校の先生や保護者との丁寧な対話、子供の見取りの共有、プロセスの語り合いなど。保育者がどのように子供の育ちを考えて環境構成をしているのか、小学校でもっとこういうこともできるのではないかと一緒に考えていくとよい。
- 園も小学校も学習者主体の学びを進めていくことが重要。教員や保育者の学習観、指導観は大きなポイントである。教師が学習者主体の学びを体感し、スキルアップしていくことが重要。
- 3歳未満から3歳以降の保育をどのようにつなげていくのかが課題。

（幼児の主体性と保育者の意図）

- 教師主導型、保育者主導型から子供主体へという流れをつくる中で、子供主体が一種の方法論として理解される傾向が強くなり、何を育てていくのかが弱くなってしまっていたという印象。方法は大事だが、方法をお互いに守り合うとなったときに、硬い保育になっていってしまうのではないか。
- 保育・教育を早くからやるのが、結果として、子供を善意で型はめしていくということになりかねないおそれがある。例えば、教育的意図というのを10の姿ということに限定してしまうと、そこから子供を見失ってしまうことになってしまい、どこかで子供を型にはめしてしまうことが結果として起こりかねない。
- 幼児の主体性と教師の主体性が両方とも発揮されて教育ということが、資質・能力という考え方が出てくることで分かりやすくなった。この資質・能力がもっと明確になる方向に進んでいくと、色々なことの解決に向かうのではないか。
- 子供の主体性と保育者の意図については、そもそもどんな子供を目指すのかということがまず大事。さらに方法として考えた場合に、バランスというと2つの別のも

のをどうやって量的に整えて合意を得るかで見られてしまうおそれがある。子供にとって意味のある活動をしつつ、教師から見ても価値のある内容を実現できるように、どうやれば折り合いがつくかというのが授業づくりであり保育ではないか。

- 共に主体であることの主体は、子供と保育者だけでなく、保護者や地域等も巻き込んだ多様な主体であり、保育とは対話的で創造的な学びのプロセスではないか。
- 環境は保育者だけでなく子供と共同で構成・再構成をしながら、遊びを展開していくことが重要。

(園の実践)

- 園で暮らす時間が長時間になっている中、どういう生活リズムをつくるのが子供が安心した居場所の中で可能性を広げていくことができるかという、時間・空間の検討が必要。これまで、カリキュラムの中で内容や活動については問われてきたが、必要な時間というものも保育の質、子供の経験の質を決めていくのではないか。
- 社会がよい子供像を求め、子供の凸凹さを許容する保育者の器が小さくなってきている。子供たちが本当にやりたいことはどんなことか、子供たちが生活する場の豊かさについて改めて考えておくことが必要。
- 小学校がどういう幼児教育が大切かを発信すると、保護者の幼児教育観を変えていく1つの力になっていくのではないか。
- 保護者は遊びをすごく大事だと思っているが、例えばドリル遊びみたいなことも遊びだと思っている可能性もあるため、遊びについて問いかけていくことが重要。
- 保育所等の未就園児への支援について、3要領・指針でどうしていくのが課題。

(条件整備)

- いわゆる行政指導ではなく、個々の園、教師、保育者を応援する仕組みづくりは、多様な園や保育の実態がある中では、個々の園というより地域に着目することが必要。
- 公立園、国立大学の附属幼稚園が、従来のようなモデル園という発想ではなく、ネットワークのハブの役割を担っていくことが重要。
- 公立幼稚園等が行ってきた公開保育や、環境を通して行う教育の実践の積み重ねなどを生かしながら、地域のハブとして活用していくことが重要。

- 地方によっては人口減少が進む中で人材確保が難しくなっている中、持続可能なシステム構築を考えれば、現役保育者のミドルリーダーが、園を超えて、地域の園内研修のファシリテーターとして他園の研修を支援しつつ、保育者としてのピア評価を行うといった仕組みを推進していくことが必要。
- ミドルリーダーの研修体制の構築や、保育者の研修時間を保障することが必要。このような取組において身につく保育評価や保育構成の力量、対話のスキルは、自園の保育や保育者間の関係性、さらには地域全体の保育についても、学び合い高め合う共同体としての資質向上につながっていくのではないかと。